

<ひれ克のページ>

「看板の一」の続編を作ってみました。どんなもんでっしゃろ。

「 看 板 の 六 」

『スッと、開けたら、中もピンやった。』……………「看板の一」
ここまで

さあ、それからが大変でございまして、
「ど素人のくせに、下手なインチキ考えやがって」

皆に寄ってたかって袋叩きにされ、簀巻きにして、表の川へド
ボンと放り込まれよった。簀巻きと言うのは、よく海水浴場か
なんかで、日除けに立ててある、すだれの大きい奴がありますが、
あれで身体を巻いて荒縄でぐるぐる巻きにして、川へ放り込むん
ですわ。今のコンクリート詰めのようなものですな。

何とか縄をほどいて、川から這い上がってきました。

まあ、普通の人間なら、たいていはこの辺で、
「やっぱり、バクチてなもんは素人がやるもんやない。まして、イ
ンチキなんかがうまいこといく訳がない」

と悟って、バクチなんかすっぱり止め、仕事に精を出すのです
が、この男、一回失敗したくらいでは懲りまへんなあ。

「中までピンやとは思わなんだなあ……看板のサイを出すところま
ではあんじょういったんや。その後や。壺の中と看板と違うサイの
目を出さなあかんねんなあ。こいつが難しいがな……」

まあ、しつこい奴がおったもんで……それから、毎日毎日、仕
事も何もかも放ったらかしにして、サイコロを振って稽古をしま
すが、もとより、そんなことが出来るわけがありません。しかし、
執念と言うのは恐ろしいもので、ある時、一つのことを思い付き
よった。

「そや！サイが二つあるさかい、ややこしいんや。一つでええねん。一つやったら同じ目のことは考えんでもええねん……そうか……よっしゃ、これで仕返しができるぞ……そやけど、このままで行ったら、賭場へ入れてくれへんやろな。そや、顔隠して行つたろ」

と頭巾をすっぽり被りまして、賭場へやってまいりました。

「ちょっと、やらしてもらえまへんやろかな」

「よろしいですけど、その頭巾は取ってもらわんと。うちは、お馴染みさんしか……あっ、お前この間のインチキピンちゃうんか。顔隠したかて声で分かるわい。帰れ帰れ」

「そんなこと言わんと、金持ってるさかい、もういっぺんだけ胴取らしてえな」

「また、しょうもないインチキ考えとるんやろ。やめとけ、やめとけ。（上手を覗って）え、何でやす？金持とるんやったら、もっぺんだけやらしたれ？大丈夫でっか。おい、お許しが出たさかい、もっぺんだけやらしてもらえ」

「いっぺんで十分じゃ。（腹を叩いて）……さあ、この前みたいにはいかんぞ。ドーンと張ってこいよ。勝負は一回しかやれへんぞ（壺を振る）。さあ、ドンドン張ってこい」（華麗な手つきでサイを振る。）

「へえ、手付きだけはちょっとましになりよったなあ……おい、またやがな。つぼの横見てみ」

「あ、また、サイが出とるがな。で、またピンや」

「性懲りものう、こいつアホちゃうか」

「ちょっと待て、何ぼアホでも同んなじ間違いはせんやろ」

「そらそやな。ということは、中はピンやないちゅうこっちゃな」

「間違いないな。一所懸命稽古しよったんやで。ピンが出んように」

「ほな、中は何やねん」

「分からん。けどな、ピン以外に賭けたらええねん。そや、皆で二から六まで賭けるね。誰か当るさかい後で山分けしたらえ」

「なにをゴジャゴジャ言うとんね。早いことドーンと来んかい。年いて目も耳も遠なったけど、まだまだお前らには負けんわい」

「また、それかい。そら何かのまじないか。よっしゃ、ほな、わしは二や」

「こっちは三じゃ」

「四」

「五」

「六じゃ」

「何や、何や、ピンに張る奴はおらんのんかい。ピンが出たら親の総取りやぞ。ええな。言うとかぞ。勝負は一回やぞ。サイは一つやぞ」

「分かっとるわい」

「もうないな。もうないな。ないと決まったら……（サイに気付いて）あ、こいつ外に出てるがな」（壺をかぶせる）

「こらっ、何をすんねん！そのサイは看板やろ」

「看板？どこぞのバクチに看板のサイコロてなもんがあるんじゃ。

サイは一つて言うたろ。勝負！ほれピンや。わしの総取りや」

見事、仕返しを果たします……ところが、

「こいつ、また、インチキしやがって！」

どっちにせよ、多勢に無勢です。またまた、寄ってたかって袋叩きのうえ、簀巻きにされて、ドボーン。

二回も死ぬような目に会いますと、流石のアホも、今度ばかりは目が覚めたようで。それ以来、バクチはきっぱりやめて、商売に精を出します。店の名前も、バクチの教訓を忘れないようにと、「サイコロ屋」と名付けて、看板にはサイコロのピンの絵を描きます。

元々、頭の回転のよい、何でも根を詰めてやる男ですから、二、三年もすると、出店を出すまでになりました。そこで、サイの目を二に変え、出店が増える度に、サイの目も増やしていきます。三年経ちますと、とうとうサイの目が六になりました。

簀巻きのアホも、今では押しも押されぬ大店の主でございます。

そんなある日、「とうとう六になったか」と看板を見上げながら、感慨に耽っておりますと、番頭がやってまいりました。

「旦那さん、この看板も創業以来、長ごう使こうてまして、ちょっと色が褪せてきましたんで書き直したいんですけど、よろしいやろか」

「そやな、けど、できるだけ金のかからんようにな」

「へえ、そこで、看板の裏側がまだきれいですので、これをひっくり返して裏を使おうと思いますね」

「そら、ええ考えやな」

「ほな、そうさしてもらいます」

「（慌てて）あっ、ちょっと待て、番頭」

「何でございます」

「裏返しはやめとけ」

「何ででっか」

「六、ひっくり返したら、ピンに戻るがな」